



港 開 の ひろば

NEWS YOKOHAMA ARCHIVES
OF HISTORY

編集・発行/横浜市総務局横浜開港資料館
横浜市中区日本大通3番地 〒231 電話(045)201-2100
発行 日/昭和62年8月1日
印 刷/南三信印刷所
横浜市広報印刷物登録第620167号 類別・分類B-BE160

**特別展示『横浜水道一〇〇年記念』
水と港の恩人H・S・パーマー』展紹介**

新発見『横浜水道写真帳』

宮内庁書陵部所蔵

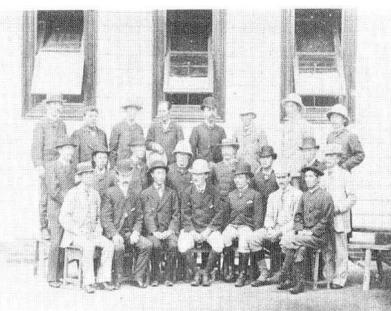
横浜創設水道の建設工事の記録
写真が見つかった。

横浜水道の工事記録は、完工後
編纂された『横浜水道誌』(明治
二四年)以上の資料を今日まで見
出しえていない。その『横浜水道
誌』には、三六図用意された設計
図面類も五図しか収録されておら
ず、写真は全く挿入されていない。
写真印刷の普及する以前の報告書
であるから写真の無いのは当然で
ある。しかし、横浜水道も、他
の同時代の大土木工事と同様に、
文字情報とは別に、写真による工
事記録を遺していた。一〇〇年ぶ
りの『横浜水道写真帳』は宮内庁
書陵部に保存されていたのである。
『横浜水道写真帳』は、時給仕
立てのアルバムといい、着色仕上
げという点でも全く『横浜写真』
による土木写真帳である。宮内庁
書陵部の記録では「明治二〇〇年
鈴木写真館」とあり、おそらく横
浜ゆかりの写真師・鈴木真一が撮
影したのであろう。

写真是全三〇葉。津久井郡三井
機関室ボイラ、揚水ポンプの写
真がつづく。この取入所機械室に
ついては『横浜水道誌』に詳し
い記述があるが、百聞は一見にし
かずである。今年の渴水で水面下
から露見した機械室の遺構と照合
することもできた。

四枚目の写真是取入所機械室前
での記念写真になっている。前列
中央に横浜水道監督師のH・S・
パーマー、左隣に神奈川県知事沖
守固がいる。パーマーの右隣は若
き県技師三田善太郎であろうか。
その隣の外国人は、揚水ポンプ脇
に写っている人物と同一人である
ことから機械監督のウォーキンショ
ウに間違はあるまい。とすれば、
沖守事の隣は監督助手のターナー
か、職工長のバクバードだ。県書
記官の田沼健、三橋信方らしき人
物もいる。これほどのトップクラ
スが取入所に一堂に会するのは、
明治二〇〇年九月二日の揚水式以
外にありえない。

六枚目からは第一工区(取入所



(大島村間)の導水路鉄管敷設工
事写真が一六葉あり、掘削、鉄管
の輸送、運搬、敷設の様子を伝え
る。ドコヒール軌道の写真も貴重
である。敷設工事写真が最も工事
の遅れた第一工区にはほぼ限られて
いるのは、揚水式に合わせて撮影
が進められたせいであろう。つい
で、既に敷設工事の終了した相模
原字山之神、鶴間村の光景がつづ
き、上川井の接合井へ至る。そし
て最後の四枚は、野毛山の汚水池
と、貯水池、横浜鉄道停車場前噴
水基、横浜水道事務所の竣工写真
である。これだけでも当時の工事
の困難さ、明治の土木の偉業は充
分実感できる。強いて欲をいえば、
第一工区や第三工区、市内配管の
工事写真も撮つておいてほしかつ
た。それは高望みというものであ
ろうが、『横浜水道写真帳』の發
見はまた、未見の『横浜築港写真
帳』の存在を予感させる。(良)

『H・S・パーマ』展によせて

明治の土木と政治

御厨貴氏に聞く

横浜開港資料館では八月一日から「水と港の恩人 H. S. ハーマー」展を開催しますが、本日はこれにちなみ、これまで物の点から研究されていなかった土木事業を政治史の面から研究されたる東京都立大学法学部助教授の御厨貴さんにお話を聞きしました。

——まず最初に御厨さんが近代政治史研究のうえで明治十—二十年代の土木に着目された動機についてお聞かせください。

ありません。臨時建築局について調べていくうちに藤森照信氏の学位論文にぶつかり、触発されて土木の問題に焦点・対象を絞り、特に東京の問題で展開したのが『首都計画の政治』（山川出版社 一九八四）なのです。

（成立）ができると途端に国家権力が河川を統制して、日本全国の河川の中央集権的な把握が確立したとされるが、それは法文の存在と実態を区別しない議論です。浸透するには時間が必要です。

付いた。そうすると東京市政の確立というより、東京・横浜というものを一緒におさめた形で都市政治の確立という範疇で促えた方が良いのではないかと考えているところです。

——水道法などでも同じです。ね。ほとんど何も変わらない。

——当館に横浜水道に絡む伊藤博文から沖守固県令宛の書簡が所蔵

これまでの近代史は若干翻訳過剩ぎみでした。それに対して、(公共財)を捉えて具体的な物について歴史を語ることが、政治や行政の中でも大きな比重を占めていたのではないか、明治十年代の地方の近代化を考える時には、現実に目の前にあるものをどう作り変えていくか、あるいは新しく作るかということだが、実は重要な問題だったと思うのです。前の『明治国家形成と地方経営』(東大出版会一九八〇)では、特に地方の問題を中央でどう捉えていたかということを中心考察してみました。たゞその頃は公共財全体で特に土木に集中して関心があつたわけでは

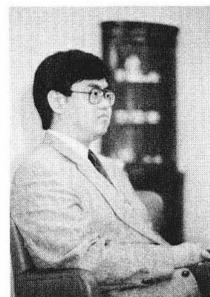
等は中央から派遣され、地方へ行つて人民の言う事など無視して近代化に努め、地方で色々転轍を生じたとされ、地方史の書き方自体も従来のものは、被害者意識に満ちている。しかし、本当にそうなんだろうか。中央・地方というのをのんべんだらりと抱えないで、地方官といふものを独立した主体として考えていく。今、地方の個々データ集めと地方官会議の資料

度ができるても、その実態とはギャップがあるのが普通で、そのところを追究してみようと思つています。日露戦争後には発電水利もかわってきますしね。近代化の中での水資源問題というのが第一番目に私が立てている問題です。第三点は、都市政治がいつ頃一つの

道事業は一〇〇万円もかかる大事業だからいろいろな人と熟談の上手落ちのないようにやれ」という程度に捉えられていたのですが、日付が七月二十一日だというだけでは年次が不明だった。これを種々検討して十七年と判断した。すなはち横浜の水道が決裁される直前に当たり、いかにも意味ありげに申えてくる。改めてこの手紙がどういう意味を持つか考えてみたいと思うのです。書簡中の奈良原・南という人物は、元安積疏水掛長を原良原繁と農商務省疏水掛長の南

分析をやっていますがこれが土木の問題とどうつながるかですね。

形態をとつていったのか。明治國家における東京市政の確立期は、い



御厨 貴氏

馬鹿のことを書簡口の祭典原と可
といふ人物は、元安積疏水掛長を

七
集
卷
之

沖守固神奈川県令宛伊藤博文書簡〔明治17年〕7月21日

當館所藏

郎平だと考えられます。そうなると農商務省の疏水掛が水道事業に絡んで何かチヨツカイを出して見たいという手紙でなかつたかと思えるのです。また改めて「横浜水道誌」やパーマーさんの設計書を読み直してみると、ちょうどこの時期に民間結社というか、神奈川県で疏水をやろうという計画があつて、それを検討しなくてはならないことがある、うまくつながる。農商務省の疏水掛の動きというのは明治十年代に非常に強い勢力であつたようで、結局内務省の土木局との所管争いがあつたとも感じられる。横浜の水道ばかりでなく、琵琶湖疏水の問題と同時期であることを考えるとそれなりの意味があるのではないか。御厨 横浜の場合は、外務省が絡んでいるケースが多い。これは横浜の国際性を物語るのかとも思えますが、この時期で言えば、内務卿が山縣有朋、外務卿が井上馨、宮内卿が伊藤博文で所謂長州の三羽鳥であるし、三人が政策面で大きな対立状況にはない。したがって最上層のレベルで言えば割合スムーズにすることは動いていると思う。上申書が出てから、裁可されるのに一年少しくらい非常に早いですよ。

水道を引くなどというのは、いろいろと金のかかる問題で、殊にこの時期は松方デフレで緊縮財政ですから、金を使ってやる事業といふのは余り好まれない。

——そうですね。神奈川県でも居留地をもっている特殊性があるにしても、居留地の土木経費は一定の枠で渡してあるから普通のものはそれで賄えといって、余程のことではない限り別枠で造るということはないですね。おそらくこの水道事業は居留地の経費の中ではやりきりがないことなので外務省は動かそうとした。

のか、むつかしいですね。

۱۰

が水道会社を創ろうとしている。水道の場合 東方では沿岸第一の民活なんでしょうかね。民間結社というのもよくあるケースですし、少なくとも水道事業の場合、民間

レベルでやれるという意識が当初からかなり強くあつたのではない
か。そうすると内務省と大蔵省との交渉では金が出ない。金が出なければ計画はどんどん遅れ、あるいは縮小される。それならば思い切って民間にやらせた方が良いとなる。水道の場合には特にそうでしょ
うね。

とで県議会と民間結社と国と三つのやり方があると言われている。なるほどと思いました。これを横浜の水道・築港に当てはめてみると、やはり、三つのルートがある。その一つの県議会の承認を得てやるというのでは、デフレの中で土木費は必ず削減される傾向にある。そういう状況の中では、民間から国からということになりますね。

横浜の場合、伝統もあるから水道会社をどうにか盛り立ててやらすという手もあつたと思うがやらなかつた。明治十四年二月に県が木樋水道を今後どうするかということを、旧水道資本金主に諮詢した。水道会社の大倉喜八郎らは、商売にならないから従来通り県で管理してくれと答申している。それで県は、民間資本もダメであると判断し、あとは国を動かすより外なしということになつたのでしよう。

御厨　たしかに外務省をついた感じがありますね。

——もともと外務省にも弱みがあつたようで、十五年の条約改正予議会でパーカスが居留地の問題として水道建設の陳情があることを告げると井上外務卿は、会議とは直接関係ないが実現したいと思ふと言つたこともあります、やらざることを得ない状況になつた。こう考えると納得できる過程になる。外務

御厨 条約改正にひっかけるのがうまいですね。条約改正の問題は優先順位ナンバーワンですからね——どこを動かせばいいかにうまくいくんだろうかということを誰が

御厨 何んらかの事情があつたく
でしようね。それと伊藤が結び付
いているのは間違いない。また他
方で、明治時代は思いつき的で計
画をもつていつても面白ければやつ

——そうですね。神奈川県でも居留地をもつて居る特殊性があるにしても、居留地の土木経費は一定の枠で渡してあるから普通のものはそれで賄えといって、余程のことでない限り別枠で造るということはないですね。おそらくこの水道事業は、居留地の経費の中ではやりきれないことなので外務省を動かそうとした。

御厨 やはり国際性の問題を絡めてやろうとしたのでしょうかね。

先程の伊藤の書簡の意味は何なのか、むづかしいですね。

水道の場合 東京では渋沢栄一が水道会社を創ろうとしている。民活なんでしょうかね。民間結社というのによくあるケースですし。少なくとも水道事業の場合 民間レベルでやれるという意識が当初からかなり強くあつたのではないか。そうすると内務省と大蔵省との交渉では金が出ない。金が出なければ計画はどんどん遅れ、あるいは縮小される。それならば思い切つて民間にやらせた方が良いとなる。水道の場合は特にそうでしょうね。

——御厨さんの本を読んでいてか。そうすると内務省と大蔵省との交渉では金が出ない。金が出なければ計画はどんどん遅れ、あるいは縮小される。それならば思い切つて民間にやらせた方が良いとなる。水道の場合は特にそうでしょうね。

御厨 告げるに外務省をついた感じがありますね。

——もともと外務省にも弱みがあつたようで、十五年の条約改正予議会でバーカスが居留地の問題として水道建設の陳情があることを告げると井上外務卿は、会議とは直接関係ないが実現したいと思うと言つたこともあり、やラガズを得ない状況になつた。こう考えると納得できる過程になる。外務卿も頑張つて、あとはどこから金を出すかということになり、大蔵卿を説得したのでしよう。

構想して考えるのですかね。県知事かその下の書記官のレベルなんか。それは、官僚制の確立の問題ですか。関わってくるのでしょうか。
御厨 これも私が今やっている地方官研究と多少関わってくると申しますが、当時の地方官や大臣は決して一人で政治・行政をやってている訳でない。彼等は必ず黒子であるスタッフを何人かかかえていた。スタッフが相当動いていると思う。地方にあっては、江戸時代の直轄地で言えば代官所に雇われていたものが引き続き新政府に雇われているケースが意外に多いと思われます。そうでなければ統治なり行政なりを安定的に運営するのは不可能ですよ。横浜の場合も県令一人では限界があり、やはり有力スタッフがいたのではないかであつたかを探すのは非常に難しいでしようが。

てみるという時代ですよ。

——奈良原と疏水掛ということことで、言えれば、内務省の中で長与専務衛生局長が頑張る訳ですね。

御厨　これがまた一つの独立した局なんですね。局あつて省なしといった感じで。三島通庸が土木局長になつたり、長与が衛生局長といふような相当個性の強い局長がつくと上の次官・大臣が誰であろうとも、その局自体三島のもの、長与のものといった感じで動きます。上もそれを統制違反だとはどちらかい。

——組織的にスムースな流れが確立してくるのは明治二十年代でしょうかね。

御厨　議会が始まると、それにどう対応するかということでもときどきらなくてはならないくなる。もう一つは、帝国大学ができてその卒業生が採用されるようになる。そうなると職制で動くという官僚制になつていく。

この時期は一言居士というか事業ができるんですね。

——議会を通す訳でないから局でも大臣をまきこんで頑張れば事業ができるんですね。

御厨　そう。そういうことができ

た唯一の時代ですよ。明治二十三年迄は。

この時期の地方官・局長の中にいる上位のクラスの人より有能なのはどうしてその地位にいるのかわからない人がいます。たまたま維新の時に出遅れただけかもしれないのです。近代的官僚制の原理から言えばその人達をどうリタイアさせていくかという議論になる。議会の始まる頃からのことですね。

——いろいろなつながりを個人で追えるというのは、身近に感じられますね。

御厨 横浜の水道の問題というのが横浜の問題にとどまらず内務卿とか外務卿のレベルにススメと行ってしまう。層が薄いというかすぐまで見通せるという感じで面白い時期ですよ。

——横浜の築港について伺いたいと思います。築港の経緯を『横浜毎日新聞』で追っていると、県令の沖守固が在任中にやりたい三つの事業があるという記事にぶつかりました。三つの事というのは、水道・港・建築条例を指すのです。が先程の扱い手論で言えば、水道は国、港は民間、建築は県費でと、いうことになりますね。築港の実際の経緯を追って見ると横浜正金銀行頭取の原六郎らが中心となって横浜港埠会社設立願を県知事に提出し、知事は内務省に上申し、査定も行われた。しかし、大

隈が外相になると横浜築港は民間ではなく國費で行いたいという請議が出され、これはすぐに認可された。先の民間会社設立願はどうなったのかよくわからない点がでてきました。

御厨 改進党の大隈が外相としてカムバックしてくることと関係あります。

——横浜築港計画は、東京の市区改正の中での築港を意識して動いているようだが、東京でも田口卯吉など民間の動きもあつたし、東京側で横浜をどう見てたのでしょうか。

御厨 東京の計画は費用の問題をはずして議論しているところがあり、いざれは東京築港をやるが、時期的には中長期的なレベルで考えていた。まず道路・運輸関係をやる。築港はその後だということですね。審査会の議事録にも横浜のことは出てきません。

——条約改正の動きとも関係ありますか。

御厨 そう、十七年から十九年の時期は条約改正が軌道に乗ろうとする時期で、港を動かすことには大問題な訳で、外務省はことさらに波風を立てたくないですよ。

——横浜の居住民も東京には移りたくないですね。また、東京築港は技術的にも困難な点がある

せる要素はあつたろうが、まあ井上馨外相の首都計画の中でも東京築港は本気で考えていないですね。

——土木好きの井上が臨時建築局總裁であつても、外交問題に発展することには触れたくない。

御厨 井上はやはり、まず第一に外務大臣ですよ。明治二十三年の議会開設前に条約改正に何らかの決着をつけることは優先度ナンバーワンの政策であつてそれに抵触することは捨てるか、考えないです。

——先程話の出た明治二十一年の大隈の請議ですが、築港計画の中ではなにか唐突な印象を受けますね。

御厨 確かに唐突ですが、大隈は改進党に乗っているので、東京・横浜双方の改進党の利益を比較・検討しているのではないですか。

——大隈がパーマー案を押し切つて採択させ得たのは、資金的裏付けを持たたからで、そのメドはアメリカから返還された下関戦争の賠償金だった。しかし、この金の存在は皆知っていたし、外交的な金だから井上外務卿も動きそうなのに、動きはなかった。

——もう一つは民間会社の願い

の扱いですが。

——もう一つは民間会社の願い

の扱いですが。

など、改進党の研究は余り進んでいないが面白い問題ですね。それでもこの問題を處理しきつてしまつ。相当な政治的力です。

——横浜築港の所管が土木行政局であつても、外交問題に発展することには触れたくない。

——横浜築港局ができ、たまたま防波堤のコンクリートに亀裂が入るという問題が起り、一時工事が中止された。そのさ中にパーマーさんは亡くなりました。

——死んだ後にも監督責任者が悪いなどと議会で問題にされた

松平春嶽偽上書の顛末

前回企画展の「情報基地」として
横浜居留地一コリナリに、前編

藩主松平春嶽の偽上書を、福井市立図書館のはからいで展示することができた。偽物を出陳するにはあまりないことなので、展示御覧になつた方は、少々奇異に心われたかもしない。そこで余が批判して開国政策を勧める偽上書顛末を、少し詳しく紹介する。

Prince of Echizen memorializes
dairai Shiringaka. The retired
the Tycoon ふなつひこう(ただに)
の切抜ば革本國へのオールコッ
クの報告には同封されず、また英
国議会への報告でも、春獄の開国
論へ簡単な言及がなされただけで
ある。

攘夷鎖港が喧しく唱えられた時
期における開国和親説の掲載は、
居留地社会等へのどのような影響を
もたらしたか。

攘夷 港が喧しく唱えられた時期における開国和親説の掲載は、居留地社会等へのどのような影響を与えたのであろうか。なかなか論証はむずかしい。

ついで、「新聞面には大に御老(公様)を奉讚候」故、越前屋はその新聞を江戸の「御上屋敷へ差出候処」、「萩原様にて御懸念波被候には、ケ様之事を狠に新聞に加へ、いまだ諸公の心も不解に、「太」切之事に也有之哉と、若万一此方より洩ら

し候様に他見せられんも大事かとの御気付きに御座候……いかにしていづかたより手に入れ候哉、一向合点参かね候、素より政府之内より可出筈も有之間敷」と、江

ある。偽上書を誰が、いつ、どの
ような意図で、ジャパン・コマ
ーシャル・ニューズへ持ち込んだの
かは不明であるが、右の様な結果
を生じたのは面白い。

最後に偽上書の骨子の部分を左に記しておく。今攘夷を唱ふる者は彼れを知らざるの議論にして吾が國之の為に乱るゝに至るべし然るに世運の変革に随ふて和親通商

それでは、こ

の偽上書が全く芳

べし加之吾が国内より夷人を追出

ところで、この新聞は、当館所蔵の一八六四年三月十六日付第四十五号を除いて、日本ではいまだ発見されていないが、第四十四

本貿易新聞 第四十四号として回覧された。この翻訳筆写新聞の一
つが、東大明治新聞雑誌文庫の中
に収蔵されている。またこれとは

に掲載された偽上書の切抜は、
天国外務省文書(F.O.262)の、
奈川領事チャールズ・A・ウイ
ンチエスターから駐日公使オール

別に、展示に供したように、福井県立図書館保管松平文庫の中に、ほぼ同訳の筆写新聞が所蔵されてゐる。

「ツクへあてた報告（一八六四年
月十四日付）の付属文書の中に
見つかった。記事のタイトルは、
Views and opinions of Mats'-

松平文庫版の新聞には、横浜の
越前屋金右衛門から江戸藩邸の千
本（弥三郎）へあてた書簡（文久
四年二月十九日付）が添付されて

都守護職として春嶽は京に滞在中であった。横浜鎖港問題等による参預会議の解体という情勢の中で、三月十三日、京都藩邸では、春嶽

見当をつけていた。この時、応待に出た藩士堤五市郎・海福雪・近藤亮助等との間で、時事が議論され、藩論と横井小楠が指導する拳藩上

るべからず」（松平文庫版）。横浜居留地は、情報が集まりまた出てゆく基地でもあつた。（吉良芳恵）

『横浜にあつた西洋—幕末の外国人居留地—』展余話

いて、福井藩が独自のルートで、新聞を入手していた様子が伺われる。少し紹介してみよう。

の京都守護職辞職と帰国を願い出ることが決定されている。しかし、それには、理由が不足していた。

洛計画が伝わった。同じ七月五日、芸州と有馬両藩の探索方へも同様の情報が伝わっている。福井藩内

月刊ボックス・オブ・キュリオス

—資料よもやまばなし—

明治日本を風刺した外国人漫画家といえば、ワーグマンやビゴーの名がすぐ思い浮かぶ。当館にもワーグマンの『ジャパン・パンチ』やビゴーの雑誌や画集はかなりよく揃っている。

ところが最近、ブルーム・コレクションの未整理の資料のなかから珍しい雑誌が一冊見つかった。『イラストレイティッド・マンスリー・オブ・ザ・ボックス・オブ・キュリオス』 Illustrated Month-ly of the Box of Curios の第1号(一八九二年五月号)である。十六枚の図版に説明文が一ページ付いただけの薄い雑誌である。専門漢字が資料紹介というのも気がひけるし、わからないことばかりなのだが、ここに紹介して、大方の教示をおおぎたいと思う。

発行者 E・V・ソーン

蛇原八郎著『日本欧字新聞雑誌史』の数行の説明によれば、活版屋のE.V.Thorn が一八八八年にボックス・オブ・キュリオスと題する週間英字滑稽新聞を横浜で創刊したという。

ところが今回見つかったのは、あきらかに月刊の雑誌である。

デイレクトリー(在日外国人名

簿)、横浜外人墓地の碑、英字新聞の死亡記事や横浜港船客欄などを調べてみた。これらの資料にはいくつか食い違いもみられるが、かいつまんでいうと次のようになる。

エドガー・V・ソーンは一八四七年九月ニューヨーク州生まれ。

パシフィック大学卒業後、実業の世界に入る。銀行支配人などを経たのち来日(一八八七年十一月横浜着、東京のジャパンニーズ・アンド・アメリカン貿易会社の支配人となつた。ソーンはこのとき四十歳。デイラクトリーによれば住所は当初から横浜になつていて、貿易会社をやめて横浜で『ボックス・オブ・キュリオス』紙を創刊したのは一八八九年未か一八九〇年。これは小さな新聞でのちに週刊となつた。当初から印刷所も兼ねていたと考えられ、それが一九〇〇年には、ボックス・オブ・キュリオス印刷出版社となつた。

この会社には息子のチャールズも経営に加わり、一九〇七年には、アーチスト・植字工・印刷工・製本工あわせて一〇〇名をかかえる大きな印刷会社に發展している。

ソーンは一九一二年二月四日、病氣療養のために出かけたマニラで客死、事業は息子に引き継がれ

た。横浜外人墓地には妻フランシス、娘エドナ、息子チャールズの墓があり、そのすぐかたわらの土手にソーンの碑が埋めこまれている。

居留地の滑稽雑誌

さて肝心の雑誌であるが、手掛りがまるでない。一八九二年五月が第二号とする、創刊は当然四月である。英字紙に小さな広告でも出していいかと捜してみたが、あいにくこの時期の英字新聞、とくに日刊紙や広告紙はほとんど残存していない。『週刊ボックス・オブ・キュリオス』紙も幻の新聞である。手許にある一冊から推測するしかない。

大きさはB4判の短辺を少し切つたくらい。表紙は、石版の多色刷りで、「魔法のキュリオス(珍しいもの、面白いもの)の箱」といつた感じの図柄である。

たぐいはB4判の短辺を少し切つたくらい。表紙は、石版の多色刷りで、「魔法のキュリオス(珍しいもの、面白いもの)の箱」といつた感じの図柄である。

画家はだれか

スケッチの多くには、FANという署名がある。いつたいこの画家はだれだろうか。

この雑誌の刊行時期とワーグマンやビゴーの活動をくらべてみると次のようになる。

一八八七年

ビゴー『トバエ』創刊

『ジャパン・パンチ』終刊

一八九〇年

ビゴー『ボタン・ド・ヨコ』創刊

一八九一年

ワーグマン病没

一八九二年 当該誌発刊

一八九三年

ビゴー『ル・ポタン』創刊

画の大部は、横浜の外人居留地の出来事・人物を題材にしたもので、なかでも競馬に関連したもののが目立つ。条約改正問題が新聞紙上(英字新聞もふくめて)をにぎわしていた頃であるが、そんなカタイ話とはまったく無縁の世界である。ちなみに、競馬は居留外国人の最大の娯楽のひとつで、日本レースクラブのレースの日には、銀行などが休みになつたほどであった。

ワーグマンやビゴーにも、辛辣な時局風刺とはべつに、居留地社会の人や出来事を滑稽に、あるいは皮肉に描いたスケッチがある。この雑誌はどうやらその系統に属するものといえよう。

左は当該誌の一部分で、競走馬の競り。状況こそちがうが、いずれも競馬関係のシーンで、構図といい、登場人物といい瓜二つではないか。

右は『ボタン・ド・ヨコ』から、一八九一年の日本レースクラブの競馬の賭を描いたもの。因



ビゴー『ボタン・ド・ヨコ』から



『キュリオス』から

表紙をめくると、説明文が一ページあって、あとは全部図版となつていて。一点をのぞいてすべて單色のスケッチである。

(伊藤久子)

横濱人物小説

15

越前屋金右衛門・石川屋善右衛門こと

岡倉 覚右衛門

はじめに

開港記念会館の脇に「岡倉天心生誕之地」と刻まれた石碑がある。

ここにかつて福井藩の横浜商館石川屋があつた。その經營にあたっていたのが天心の父、覚右衛門である。「元治二年五月三月人別帳(市史写本)」に「生國越州吉田(足羽カ)郡福井助(勘カ)右衛門姓(徳)右衛門間仕切同居全(金カ)右衛門当丑四十六才」とあるのが天心である。

前回の企画展示「横浜にあつたものが天心である。

右衛門間仕切同居全(金カ)右衛門当丑四十六才」とあるのが覚右衛門、「性覚藏 同四才」とあるのが天心である。



西洋—幕末の外国人居留地の開催にあたっては、福井県立図書館の御好意により、同館の保管する

松平宗紀氏所蔵の藩政資料「松平文庫」から、貴重な資料を多数御出品いただいた。そのなかに「新番格以下諸代マテ」と題する藩士の履歴簿冊があり、覚右衛門の履歴も収録されている。

それによると覚右衛門は郡奉行井原次郎左衛門組に属する下級藩士で、安政二年「出精相勤候ニ付諸子代」に任命され、「切米八石式人扶持」を給された。同年秋、御納戸方下代として江戸詰となり、四年にはなぜか坪田と姓を改めている。

舟沢茂樹氏の「岡倉覚右衛門と福井藩の横浜貿易」(『淨世夫彦』第六号)によると、下代とは卒の一職種で、下級の事務吏員を意味する。當時福井藩は、横井小楠の殖産・交易による富国策を採用し、制産方頭取三岡八郎(のちの由利公正)が中心となり、海外貿易に乗り出そうとしていた。

石川屋の開業



岡倉 覚右衛門

石川屋の沿革については、文久二年九月に覚右衛門が記した「覚

『神奈川郷土資料集成・開港編』に「横浜商店時情書」として収録によって知ることができる。

安政六年四月、覚右衛門は御作事方下代を兼勤し、幕府から開港場の警備を託された福井藩の「太田御陣屋御普請御用掛り」として横浜で働くようになる。また、製

産方では六月の開港を期して「御国諸産物完捌所」を横浜に設けることになり、陣屋建設の際、横浜村名主石川徳右衛門に「御用向」を依頼した関係から、「同人名前」で借地と営業を申請し、与助という人物を支配人に雇った。これが石川屋である。取扱品目は生糸、呉服等であった。

横浜出張中の覚右衛門は、同店の「毎月勘定」を手伝い、一二月には製造方下代に任命された。そして翌万延元年三月二三日、「制産方御内用有之ニ付、立替之上横浜商館手代勤被仰付候」ということになったのである。「立替」とは、藩籍を離脱した覚右衛門に替えて、資官次が国許で諸下代の内に採

用されたことを指している。これ

では探索方を通じて、各地で情報収集に努めていた。横浜発行英字紙の翻訳筆写新聞の入手もその一環だが、覚右衛門はこれとは別に、重大な事件のつど直接英字紙(おもに「ジャパン・コマーシャル・ニュース」)を入手し、また、米人ヴァン・リード(弁護士)と接触し得た情報を、書簡によって、あるいは江戸藩邸に出向いて報告している。実際上、横浜における探索方の役割を果たしていたのである。

また老本多修理の江戸滞在中、その求めに応じて、純金時計・同鎖・時計台・小望遠鏡・水平器等を調達しており(『越前藩幕末維新公用日記』による)、こうした舶来品の入手も彼の役目であった。

小遣竹治郎は三両であった。

岡倉 覚右衛門

石川屋と越前屋

文久元年一二月、店の名義を福井城下の町人山口小左衛門に変更することになった。ところが生糸

川屋の名称が残ってしまい、名義部門だけは、「新規願」不許可といふ神奈川奉行所の方針のため、石川屋の名称が残ってしまい、名義料として徳右衛門に益暮三両ずつ支払うことになった。他の部門は

「徳右衛門店之内間仕切致し」小左衛門が営業することになった。後者が越前屋(あるいは越州屋)である。越前屋が石川屋に「間仕切同居」するという体裁だが、実際にはいずれも覚右衛門が取りしきっていたのである。なお、慶応三年頃を境に金右衛門から善右衛門に名乗りが変わる。また、時期は不明だが岡倉姓に復し、父祖代々の覚右衛門を襲名したようである。

晩年

明治維新ののち、藩営商社であった越前屋は閉鎖される。六年、覚右衛門は家族とともに、東京蠶殻町の福井松平邸の一角に移り、翌年覚藏名義で、宿屋と越前物産取次所を開業した。覚藏(のち覚三)はここから東京外国语学校に通いはじめる。晩年の覚右衛門は、月夜庵鶴由と号して、好きな美濃派の俳諧を楽しんだという。明治九年九月九日没、七七歳であった。

(本稿執筆にあたつては、福井県立図書館奉仕課長舟沢茂樹氏より種々御教示をいただきました。)

(齊藤)

もう一つの顔
松平文庫から御出品いただいた
資料によって、覚右衛門のもう
一つの顔が明らかとなつた。福井藩

